

この絵と私

「極楽浄土へ向かう母と子」



この一枚の墨絵は
十数年前から私の居
間の鴨居（かもい）
にかかっている。

淡い墨ですっきりと
描かれた心ひかれる
絵である。少女時代、
勉強中も机の上に教
科書を、膝の上に小
説を置き、登場人物
「特に女性を想い描



吉屋信子「徳川の夫人たち」挿絵 日本美術院 佐多芳郎

墨絵 二十一・八 × 十六糎

くのが好きであった。母と子の像には、油彩、水彩を問わず古今多くの名画があるが、この白い紙に墨の線で描かれた母と子の後ろ姿には特に魅せられてしまう。この「母子」図は極楽浄土へ向かう母と子を思わせ、その後ろ姿に呵弥陀如来の慈愛の光さえも感じてしまうのは、まさに隠れた名画といえるのではないだろうか。この絵が昭和四十一年ころ、朝日新聞紙上に連載された吉屋信子作「徳川の夫人たち」の挿絵の原画であることは後で知った。夢幻的な雰囲気には現世では築くことの出来なかった「しあわせ」を来世に託す姿の暗示を見た。三代将軍家光が生涯ただ一人心を頼んだお万の方の見守る臨終の床で、幼き自分に情なかつた亡き母――

崇源院が今、愛のまなざしで姿を現す。その瞬間、家光は幼い竹千代に戻る。天下一の権力者となつても、弟君国松にのみ傾く母君のゆたかな愛を受けて育ちたかつたと、切に望む心の空隙は、死の床の夢の中にまで迫り、その時やつと望み叶うのである。母は優しく手を引いて何処かに立ち去ろうとする。「何処へ」とうつつの中で幻の母に問いかける。この夢の絵は、何とも言えぬ寂しさの中に、神秘、華麗な色彩を彷彿とさせる。登場人物とともにさながら、極楽浄土の世界に導き入れられる思いがするのである。

河原碧子

(日本画家 河原デザイン スクール理事長)

神戸新聞掲載 昭和五十九年二月五日